

【北上山地のマツタケ】

北上山地の安家（あつか）といえ、短角和牛の生産で有名である。北上山地のなかの山村であり、落葉広葉樹林の錦繡は見事である。昔は安家炭や鉄道の枕木にするクリ材の供給地でもあった。人類学者・岡恵介さんは安家の住人となって長い間調査していた。彼のもとを訪れて安家の人びとに植物の自然利用などを教えてもらったことがある。驚いたのは北上山地ではマツタケは昔はそれほど珍重しなかったと言われたことである。東北では茸類は豊富でマツタケはマイタケなどに比べると価値が低く、マツタケなどは放牧の牛が食べるにまかせていたそうだ。戦後のいづごろからか西日本ではあんなもんが凄い高価なんだそうだといいことで採るようになったそうだ。芭蕉の「まつ茸やしらぬ木の葉のへばりつく」は伊賀上野にきた支考と斗従にマツタケを贈った時の句とされるし、蕪村の「君見よや拾遺の茸の露五本」は宇治の山中で若者が取り残したマツタケをみつくて大喜びの気持ちを表現している句である。西日本ではアカマツ林の下に生えるマツタケは芭蕉の頃すでに貴重な酒肴であった。